

ヤーコプ・ブルクハルトの公開講義

中 谷 博 幸

I

ヤーコプ・ブルクハルト Jacob Burckhardt (1818-97) は『イタリア・ルネサンスの文化』の著者としてあまりにも有名であるが、79年の生涯の後半期は休暇中の旅行を除いて、もっぱらバーゼルにあって、自らに課された講義に全力を集中した。もっとも彼が大学で安定した地位を得るのは、比較的遅かった。ブルクハルトはベルリン大学でランケや美術史のフランツ・クーグラールに学んだのち、1844年に故郷バーゼルに帰って来た。それからずっと後、当時のバーゼルの慣習に従って葬儀の時に読まれることを念頭において1893年に書かれた自伝のなかで、1844年の帰郷後の様子を次のように語っている。

彼は1844年に私たちの大学の歴史の講師の教授資格を得て、45年には員外教授の称号を獲得した。……1848年に彼は再び当地の職務につき、今度は同時に師範学校の実科の歴史学教師となり、はじめて安定した地位にあって自らの学問に生きることができると思った。しかし1853年にこれが実業学校に変わるとその地位を失い、文筆活動に主にたよることとなった。……決定的な転機となったのは、美術史の教授としてスイス連邦工業大学に招聘されたときである。彼は1855年秋にこの職務についた¹⁾。

そして、1858年にはバーゼル大学の歴史学正教授に任命される。自伝はバーゼル大学での彼の活動を次のように述べている。

1858年春には、当地 [バーゼル] の大学の招聘に応じ、以後歴史学の正教授として在職することとなった。……この職にあった数10年は彼の生涯のもっとも幸福な時となった。頑強なからだのおかげで1891年5月の事故にいたるまで、一時間の講義も休むことなく、なんら妨げられないで、自らの任務に献身することができた。……最初の数年間に前から始めていた著作を仕上げた後は、もっぱら彼の教授職に専念した。そのための絶えざる労苦は真の幸福感によって報われた。比較的小さな大学の必要に応じて、特殊な学識の伝達よりも、世界を歴史的に考察することへと一般に促し奨励することを、自らの大学の講座の任務と考えた。第二の活動である、師範学校の講義（最初は二つの上級クラス、のちには最上級クラスだけ）も彼に不断の喜びとなったが、不本意にも一部を、そして最後には完全にそれらの講義を断念した。その代わりに、大学で歴史学とともに美術史の科目を可能なかぎりそっくり引き受けることとなった。その結果、1882年から86年にかけて大学の義務は週10時間となった。最後にこの文の著者はわが市の公衆の前にもしばしば登場し、最初は独自の連続講義として、後には一連のこの種の一般的な企画の枠組みのなかで、美術館にある大学講堂やベルヌイ記念館を会場にして、公開講義を行なった。

願わくば、彼の講義を聴講したバーゼル大学のかつての学生諸君や、師範学校の生徒諸君、さらに冬期講義の一般の聴講の方々が、彼の死後も彼に対して好意ある思い出を持ち続けられるように。彼はたえずその職務を隅々まで尊重し、それとともに文筆上の成功を心からよろこんで放棄した。少しばかり経済的に余裕があったので、晩年、彼は、報酬をもとめてあくせく執筆したり、出版関係の奴

隷となって生きることから、まぬがれることができた²⁾。

自伝において、ブルクハルトは、1858年以後のバーゼルでの自らの活動を三つに分けている。第一に大学での講義、第二に師範学校での歴史学に関する講義、そして、第三にバーゼル市民を前にした講義である。本稿は、大学や師範学校における本来の職務とは別になされた講義がどのようなものであったのか、またどのような種類のものがあるのか、さらにブルクハルトはそれらの講義をどのような動機や態度でもって行なったのかを、主に彼の書簡³⁾によりながら、明らかにすることを目的としている。

II

まず、1858年以後、バーゼル大学と師範学校でのブルクハルトの講義に関する職務がいかなるものであったかを瞥見しておきたい。1858年ブルクハルトがバーゼル大学の歴史学講座の正教授となったとき、もうひとり歴史学の正教授としてハルトヴィヒ・フロートHartwig Flotoが在職していたが、病気のため、講義はしていなかった。ブルクハルトはフロートの代理として、師範学校の授業も担当することとなった⁴⁾。

1858年以後のブルクハルトの講義を、彼の詳細な伝記を記したヴェルナー・ケーギが、1858～61年（第一期）、61～74年（第二期）、74～83年（第三期）、83年春～86年秋（第四期）、86年秋～93年夏（第五期）に区分しているため、その区分に基づいて、各時期の特徴をまとめておこう⁵⁾。

第一期（1858-61年）では、ブルクハルトは歴史学の第二教授であった。大学の歴史学の講義を週5時間と師範学校の上級の二つのクラスを週7時間、合計12時間の講義を担当した。給与は年俸で3,700フランであったが、バーゼル市政府が1,188フラン支出し、残りの2,512フランはバーゼルのアカデミー協会が負担した。アカデミー協会は、バーゼル市の文化振興のために、芸術品の収集や、有能な学者の招聘、市民への公開講座の提供などを目的として、1835年に設立された団体である。その中心は市参事会員アンドレアス・ホイスラー（1802-68）であった⁶⁾。このアカデミー協会の給与一部負担がブルクハルトの公開講演と関わりがあるが、それは後で触れることにする。

ハルトヴィヒ・フロートは、回復を期待されたがそれが難しくなったので、1861年に職を辞することとなった。この時ブルクハルトは名実ともに歴史学の第一正教授となった。給与も4,000フランとなり、市政府が2,500フラン、アカデミー協会が1,500フラン負担した。61年から74年までが第二期である。

1874年には、ブルクハルトの働きかけにより、新たに美術史講座が設けられることとなり、ブルクハルトが担当することとなった。その結果、週5時間の歴史学講義のほかに、美術史を週3時間担当することとなった。そのかわり、師範学校での授業は最上クラスでの歴史講義3時間だけとなった。給与は市政府の支出が4,000フランとなったのに対して、アカデミー協会の負担が1,000フランに減少し、給与自体の総計は5,000フランとなった⁷⁾。74年から83年までが第三期である。

第四期（1883春-86秋）には、師範学校での講義は完全に免除された。大学での講義は、歴史学の5時間と美術史の5時間となった。

第五期（1886-93夏）は美術史のみを担当することとなった。自伝では次のように語られている。「迫り来る老いの苦痛に促されて、1885年の末、当局に歴史学の教師の職を辞することを願い出た。彼の希望によって、1886年秋以後も美術史の講座は彼に残された。そしてぜんそくの苦痛のため、ついに1893年4月に完全な辞職を願い出た。」⁸⁾ 講義の減少にともない、給与も半額の2,500フランとなった。

以上がブルクハルトの大学と師範学校における講義義務の概要であるが、一般の講演との関わりで重要

なのは、彼の給与がバーゼル市政府とともに、アカデミー協会から支出されていたことである。

III

では、ブルクハルトは大学と師範学校以外において、どのような講義活動を行なったのであろうか。ブルクハルトの講義の一部は、彼の生誕100年を記念する事業として、彼が深く関わった歴史考古協会の委託により、エミール・デュルがその遺稿を整理して1918年に刊行された。この講演集はその一部を変更して、1933年に同じくエミール・デュルの編纂により、1929年から34年にかけて刊行された全集の第14巻に組み込まれた。ところで現在までにブルクハルトの全集は三回企てられている。第一回目⁹⁾は、この14巻からなる全集である。第二回目¹⁰⁾は、第二次世界大戦後、10巻ものとして刊行されたもので、ここには講演集は収められていない。三回目¹¹⁾は現在刊行中で完成すると全27巻となる。講演は、第13巻に1870年から1892年までの講演45編が収められてすでに出版されている。1869年までの講演は、第12巻に収められる予定である。以上の講演集によりその内容を知ることができるのであるが、ブルクハルトが生涯においてどれくらいの数の講演を行なったかは、最初の講演集を編纂したエミール・デュルが調査してまとめた。全集第14巻の巻末には、年代順に146の講演名が掲載されている¹²⁾。この講演リストをもとに、現在刊行中の全集第13巻の1870年以後のリスト¹³⁾と、ブルクハルトの書簡集別巻の149-152頁の講演リスト¹⁴⁾等により修正を加えて一覧にしたものが、本稿末の「ブルクハルトの公開講義一覧」(以下「一覧」)である。これを見ると、講演テーマとしては150となるが、統一テーマによる連続講義では9回から18回におよび、一つのテーマの講演であっても、2回、3回に及ぶものがあるので、行なった回数からいうと、200回以上に及ぶ。一覧番号**20**から**27**はブルクハルトがスイス連邦工業大学教授時代にチューリヒで行なったものであるが、他はすべてバーゼルで行なったものである。バーゼルにおけるこれらの多数の講義は、おおまかに次のように分類することができるであろう。

まず第一に、様々な機会に行なわれた単発の講演がある。「一覧」の番号で言えば、**5**、**12**、**15**、**18**、**32**、**45**、**120**である。たとえば**5**の「アルマニャック派傭兵遠征時代におけるフランスの状況について」は、ブルクハルトの教授資格取得講義である。**18**の「聖ツェツィーリエについて」は、1854年11月22日の聖ツェツィーリエ記念日に男声合唱団会員のところで行なったものである。**32**はシラーの生誕百年を記念して行なわれたバーゼル大学文学部主催による講演である。**120**の「ギリシア人の学術的功績について」は、1881年の大学記念祭において、学長がバーゼルに不在のため代理で行なった記念講演である。

第二に、いくつかの団体の会合において語った講演がある。**1**、**2**、**3**は芸術家協会で行なわれたものである。また、**44**、**52**、**67**、**71**、**77**、**81**、**90**、**95**、**99**、**108**は青年会議所 Verein junger Kaufleute において行なわれた講演である。ブルクハルトは1866年12月11日のこの会議所の名誉会員に選ばれている¹⁵⁾。この第二のグループの講演の中でもっとも数が多いのは、歴史協会 Historische Gesellschaft、考古協会 Antiquarische Gesellschaft、歴史考古協会 Historische und Antiquarische Gesellschaft の会合においてなされた講演である。バーゼル歴史協会は1836年に設立されたが、6年後の1842年に考古協会が独立した。考古協会の目的は、「私たちの市とその周辺の地域にある異教時代とキリスト教時代の文化遺産を調査し、記述し、全力でその保存に努め、模写によって忘却から守ること」であった¹⁶⁾。しかし二つの協会は再び統合し、歴史考古協会となった。ブルクハルトはそれぞれの協会の会員であり、その会合においてしばしば講演を行なった。これは少数の会員を前にしたものである。たとえば、1846年2月に行なわれた**9**のサン・ドニ修道院長シュジュールに関する講演には11名が集い、バーゼル大学教授の、ヴィルヘルム・フィッシャー、ヴィルヘルム・ヴァッカーナーゲル (1806-69)、フリードリヒ・フィッシャー (1801-53) が

いた¹⁷⁾。ブルクハルトは、バーゼル大学の正教授となる以前からこの会合における講義を行ない、1858年以後も変わることはなかった。特に歴史学講座を辞任したのちも、美術史講義とともに、この講演は1892年12月末まで行ない続けた。ブルクハルトが歴史考古協会との繋がりを重視していたことが窺える。

第三に、アカデミー協会による一連の連続公開講義がある。7、8、11、13、17、19、39、43がこれにあたる。1844年11月14日から45年の冬にかけてブルクハルトは、アカデミー協会による公開講義を行った。テーマはラファエロ以後のイタリアを中心とした絵画史（「一覧」番号7）であった。土曜日の午後6時から7時にかけて、サフラン・ツンフトのある建物の大ホールで行なわれた。これはブルクハルトの「バーゼル公衆へのデビュー」であった。この連続講義の続きである「17世紀の絵画史」（8）は、翌年の冬に同じ場所で行なわれた¹⁸⁾。1848年から49年の冬にかけては、30年戦争時代の文化史（11）に関し、16回に及ぶ連続講義を行った。この講義には約250名から300名の聴衆が集った¹⁹⁾。さらに翌年の1849年11月9日から50年3月15日にかけて毎週金曜日午後7時から8時、17回にわたり「中世盛期」（13）に関する公開講義が行なわれた。これには約290名の男女の聴衆が集った²⁰⁾。その2年後ブルクハルトは、1852年11月2日から18回にわたり、再びアカデミー協会の委託をうけて、「フリードリヒ大王の時代」（17）に関する連続講義を行った。今回は約200名が聴講した²¹⁾。さらに3年後、1855年1月17日から3月28日にかけては、9回にわたり、文芸に関する様々な講義（19）を行なった²²⁾。

以上はバーゼル大学の正教授となる以前のアカデミー協会との関わりであるが、正教授となってからも密接な関係が続く。「II」で述べたように、彼の給与の一部はアカデミー協会から支払われていた。1861年10月5日付けのアンドレアス・ホイスラー宛手紙において、アカデミー協会依頼の講義について触れている。ホイスラーはすでに述べたように、アカデミー協会の創設者であり、1830年代から50年代にかけてバーゼルにおけるもっとも重要な政治家で、小市参事会員として、バーゼル教育行政の中心人物であった²³⁾。1860年から61年の冬にかけて、バーゼルでは、隔週金曜日に神学に関する公開講義や、土曜日に神学者カール・ルドルフ・ハーゲンバッハによる教会史の一般講義が行なわれていた。ブルクハルトは控えめに、「必要なら喜んでさせていただきます。大学の存在価値を示すことは、望ましいことであると思われれます。」と語り、具体的に可能なテーマとして、対抗宗教改革の時代（1550-98）と、芸術と古代に関する様々な講義（ウェストミンスター寺院や、コルマール美術館、ルーベンス、レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の晩餐など）をあげている²⁴⁾。これは、「一覧」番号39と43となって実現する。1861年11月から62年2月にかけて、15回におよぶ「芸術と古代に関する連続講義」（39）をアカデミー協会の依頼を受けて行なった。この時期の書簡には「私はこの冬とても忙しく過ごしています。すでに触れた一連の講義が、やっかいなことが起こらずに終われば、天に感謝することでしょう」²⁵⁾（ヴィルヘルム・バウムガルトナー宛1861年12月30日）といった表現や、「2月15日に過重な負担が終わることになります」²⁶⁾（パウル・ハイゼ宛1862年1月1日）といった言葉が見られる。その2年後、1863年11月から64年の2月にかけて、毎週土曜日午後7時から、アカデミー協会の依頼により「対抗宗教改革の時代」（43）の連続講義を行なった。この時は予約が530名に達し、最初美術館講堂でなされたが、場所を市カジノの一階ホールに移した。しかしそこも聴衆を収容できなかったため、11月末からは、土曜日と月曜日の2回に分けて講堂で行なわれた²⁷⁾。この講義の始まる前の10月に、「私の地位は、（本当のところ）私に値する以上に、好ましく名誉あるものです。25人から30人の受講者に教授として歴史の授業を週7時間しています。これは楽しいものです。そのほかに2年ごとの冬に、多様な公衆gemischtem Publicoを前に講義をしています」²⁸⁾（エマヌエル・ガイベル宛1863年10月10日）と書いていた。しかしその年の夏には、オットー・リベック宛書簡で、「私はこの冬、再び多様な人々の前で、対抗宗教改革の時代について講義をしました。2年前と同じよう

に外面的には成功のうちに終わりました。しかし今度は、冬中このような重荷を背負い込むことはしないと、決心しました。」²⁹⁾ (オットー・リベック宛1864年7月10日) と記した。事実、これ以後、ブルクハルトは多くの一般の聴衆を前に、一冬に15回ほどにもおよぶ過重な連続講演をすることはなかった。

もっとも多様な公衆の前での公開講義自体をやめてはいない。今まで、様々な機会に個々の事情でなされた講演や、特定の団体の集まりで限られた聴衆を前にして行なわれた講演、そして多様な公衆を前にしてなされた連続講義について述べてきたが、ブルクハルトにはそれらの講義のほかに、多くの聴衆を前にした別の公開講義があった。それは学術講義 *akademische Vortrag* と一般公開講義 *öffentliche populäre Vortrag* と呼ばれるものである。公開学術講義はバーゼル大学によって実施されるもので、「1856年に、大学と教養市民層との間に精神的繋がり結びつきをより強力にするために、導入された。」³⁰⁾ ブルクハルトは、1858/59冬以来、毎年2回から4回の学術講演を行なった。これは最初無料であったが、1879年からは大学図書館を補助するため、有料となった。もう一方の一般公開講義はアカデミー協会によって実施されるもので1864年11月17日から導入された。こちらは大学の学術講演よりもより広範な人々を対象としている。また扱うテーマも、自然科学に重点が置かれていたという³¹⁾。毎冬、一般公開講義は40あまり、公開学術講義は15あまりの講義が行なわれ、複数の講師が担当した。学術講義は講堂で行なわれた。一般公開講義も最初は講堂で行なわれたが、1874年には450人を収容できるベルヌイ記念館が建てられ、そこで実施された。

表1は、1860年以降の学術講義 (A) と一般公開講義 (P)、青年会議所と歴史考古協会での講義 (I)、および一般公衆を前にした連続講義 (II) の各冬ごとの実施回数をまとめたものである。学術講義と一般公開講義に関しては、それぞれの講義の「一覧」の番号も記している。表1を参照しながら、ブルクハルトの公開講義の活動を通時的に簡単に整理しておこう。バーゼル大学正教授となる以前、ブルクハルトは、アカデミー協会の委託を受けて、一人で冬の夕べ、10数回におよぶ連続講義を担当した。これは彼の研究成果の発表の場でもあった。バーゼル大学で安定した地位をえた後も、しばらくはこのような一人による連続講義を行なった。それにはホイスラーとの個人的な繋がりやアカデミー協会が彼の給与の多くを負担していたという事情も影響していたと思われる。しかし通常の講義義務以外にこのような講義を担当する労苦は大きく、1863/64年の冬以後、やめてしまう。しかしバーゼル市民への公開講義を放棄することはなく、ちょうど制度的に整備されてきていた大学の公開学術講義とアカデミー協会の一般公開講義の一部を受け持つことになった。1864/65年以後それぞれの講義を、平均一冬に、2ないし3回程度受け持った。同時に彼が所属する歴史考古協会や青年会議所の会合で年に1、2回講演を行なっている。1861年から79年にかけてが彼の活動のもっとも活発な時であった。これはケーギによる大学講義の時期区分でいえば、第二期と第三期の途中までにあたる。79年以後は徐々に、活動を縮小していく。まず一般公開講義をやめた。ついで82年には師範学校の講義から退き、86年には歴史学講座を辞任する。その後、公開学術講義は88年まで続けられた。最後まで残ったのは大学の美術史と歴史考古協会での年に1回程度の講演であった。しかしそれも93年の美術史講座辞任によって終わりを告げた。

社会的現象としてみた場合、19世紀後半に、一都市で女性を含む200名以上の市民が大学や大学教師の係わる講座に定期的集ったことは、重要な意味をもっている。バーゼル大学の受講者数はブルクハルトの場合、20人から50人が一般的で、最も少ない時が3名、最も多い時が「古代美術」(1890年)の75名であった³²⁾。そもそもバーゼル大学の場合、大学生の総数が19世紀末によく200名に達する程度であった。それゆえ人数の点から言えば、彼ら市民たちは学生よりもずっと多いのである。また市民の一部は大学の授業を受けることがあった。(大学の講義は学生ばかりでなく、そのような一部の市民や同僚の教師

表1 学術講義・一般公開講義回数

年度	Aテーマ	A	Pテーマ	P	I	II	計
59/60	30,31,33	3	-	-	3	-	6
60/61	36,38	2	-	-	1	-	3
61/62	-	-	-	-	-	15	15
62/63	-	-	-	-	3	-	3
63/64	-	-	-	-	2	15	17
64/65	50	1	47,48	2	3	-	6
65/66	54	1	53	3	4	-	8
66/67	60,61,62,63,64	5	58	2	3	-	10
67/68	-	-	66	2	3	-	5
68/69	-	-	69	3	4	-	7
69/70	74,75,76	3	73	2	3	-	8
70/71	79	3	80	3	3	-	9
71/72	83,85	2	84	3	-	-	5
72/73	86,89,91	3	87,88	2	2	-	7
73/74	92,93	2	94	3	3	-	9
74/75	98	3	97	3	2	-	8
75/76	102,103	3	100,101	2	1	-	6
76/77	105,106	2	107,109	3	2	-	7
77/78	111,112	2	110	3	1	-	6
78/79	-	-	114	3	1	-	4
79/80	116,117	2	-	-	-	-	2
80/81	119	2	-	-	1	-	3
81/82	121,122	2	-	-	-	-	2
82/83	123	2	-	-	1	-	3
83/84	125,126,128	3	-	-	1	-	4
84/85	129,130,131	3	-	-	-	-	3
85/86	132,133,135	3	-	-	1	-	4
86/87	136,137,138	3	-	-	-	-	3
87/88	139,140,141	3	-	-	1	-	4
88/89	-	-	-	-	3	-	3
89/90	-	-	-	-	2	-	2
90/91	-	-	-	-	1	-	1
91/92	-	-	-	-	1	-	1
92/93	-	-	-	-	1	-	1

A 公開学術講義 P 一般公開講義

I 歴史考古協会と青年会議所での講義

II ブルクハルト一人による連続公開講義

AテーマとPテーマの番号は、「一覧」の番号と同じ

たちも聴講できた。バーゼル大学の文献学教授時代のニーチェがブルクハルトの講義の熱心な聴講生であったのはよく知られていることである。)

大学を取り巻くこのような市民層はいったいどのような人々なのか。彼らは何を求めて講義に集っていたのか。彼らの一定数の存在は社会にとって何を意味するのか。こういった問いが生じてくる。しかしこれらの考察は別の機会に譲るとして、本稿では、ブルクハルトがどのような気持ちでそれらの講義に係わっていたかを、彼の書簡をもとにして、若干考えることとする。

IV

1869年にブルクハルトは友人エドアルト・シャウエンブルク（1821-1901）から、クレーフェルトでの講演を頼まれた。シャウエンブルクは1866年からその地の実科ギムナジウムの校長を務めていた。この依頼に対し、ブルクハルトは、1869年12月3日付けの書簡でその招待を丁重に断わった。この手紙には、ブルクハルトの公開講義に対する基本的な考え方がよくあらわれていると思われるので、以下、引用してみたい。

クレーフェルトでの講演に招いて下さったことは、たいへん名誉なことです。……

あなたがほのめかしているような犠牲によって、精神の育成のために一連の夕べの講演をもうけることは、それ自体、たいへん栄えているクレーフェルトのような工業都市の文化の高さを示しています。しかし私は、これまで何度も他の諸都市から講演の招待を受けてきましたが、一度もバーゼルの市門から出たことはありません。また、これからもこの地にしっかりととどまり続けるつもりです。正直に言えば、それと異なった行動をすることは、バーゼルに対する略奪行為 *einen Raub an Basel* のように思われます。私の全神経はこの地に集中しています。そして講義はそのあるべき姿であろうとすれば、神経の集中を要求します。

……次の夏学期に再びローマ史を除いた古代史を取り上げますが、現在日々その準備でおわれています。私を招待して信頼を示して下さった委員会にどうぞよろしく伝えてください。そして、すでに述べた事情と、時間のないために、おわびいたします。

私はバーゼルでこの冬すでに二晩一般の公衆の前で話をしました。そしてまだ、4日、11日、18日の土曜日の講義が残っています。私たちバーゼルで生まれた大学教員にとって、様々な一般の公衆の前で話をする *predigen* ことは、名誉ある義務となっています。……私たちのバーゼルでは毎冬、一般の公衆に38から40の講義からなる一般公開講義と、より洗練された公衆のためにより高度な14の講義を提供しています。……³³⁾

この書簡から、ブルクハルトが講義に全力を注いでいたことがわかる。次の夏学期に取り上げようとしている古代史は、死後甥によって編纂され出版されることになる古代ギリシア文化史の講義へと発展していく。彼はその準備で忙しく、講義はそのあるべき姿を取ろうとすれば、全神経を集中しなければならない。そのための時間を考えると、他の都市での講演はできない、というのである。

しかしこの手紙のもっとも印象的な点は、ブルクハルトの活動が故郷バーゼルと密接に結びついていることであろう。バーゼル以外で講義を行なうことは、「バーゼルに対する略奪行為」であるという強い言葉すら使っている。この講義は大学での講義に限定されない。「バーゼルで生まれた大学教員にとって、様々な一般の公衆の前で話をすることは、名誉ある義務」であった。彼はここで公衆を対象とする二つのタイプの講義に触れているが、「38から40の講義からなる一般公開講義」とは、すでに述べた、アカデミー協会によって催された一般公開講義であり、「より洗練された公衆のための高度な14の講義」は大学が行なう公開学術講義のことである。具体的にこの手紙に述べられている講義で言えば、ブルクハルトは1869年11月11日と18日に、一般公開講義としてゴシック教会に関する話（「一覧」番号73）をしていた。そして、12月4日、11日、18日に行なう予定の講義とは、「一覧」番号74、75、76の公開学術講義のことである。彼はそれらの講義の準備にも全力を尽くした。ブルクハルトはしばしば、手紙のなかで、講義の準備で忙しく、ゆっくり返事を書くことが難しいことを述べている。たとえば、1872年11月20日付けベルンハルト・クーグラール（1837-98）宛書簡で、「明日の特別講義の準備のためにすぐに返事をします」³⁴⁾

と述べているが、この特別講義は、枢機卿リシュリューに関する公開学術講義（88）のことである。

またこれらの公開講座の目標をバーゼル市民の精神の育成 *geistige Erbauung* においていたことも、クレーフェルトに関する言及から窺うことができる。その点に「大学の存在価値」をにおいていたと思われる³⁵⁾。この点ともおそらく係わると思われるが、もう一点興味深いのは、公開講座について、直訳すると説教する *predigen* という言葉を使っていることである。これは彼の言う自由な講義 *freier Vortrag* と関連があるであろう。1858年5月23日付けのパウル・ハイゼ宛書簡に、「私は講義のときにメモ用紙を持ち込まずに自由に語ることを誓いました。」³⁶⁾と書いた。彼はその後この自由な講義を若い人々にもすすめた。たとえば、さきほど少し引用した1872年11月付けの書簡でも、ベルンハルト・クエグラールに熱心に自由に語る講義をすすめている³⁷⁾。1880年代にブルクハルトの弟子であり、その後美術史家になったハインリヒ・ヴェルフリン（1864-1945）は「彼はまったくノートなしに、よどみなく、正確に、無駄なく効果的に、語った。もともと荘重な傾向をもっているのです、決定的な瞬間に向けて高めていくようなことはしませんでした。ケルン大聖堂の美しさや、ルーベンスの圧倒されるような才能を語る時のような限られた瞬間に、何かをほのめかすように静かに語って、声をふるわせた。」³⁸⁾と語っている。ブルクハルトはまたこのように自由な講義が出版されることをあまり好まなかった³⁹⁾。

ところで、ブルクハルトはそれから約11年後の1880年に、このシャウエンブルクから再びクレーフェルトでの講義を頼まれた。このときもブルクハルトはそれを断わるが、事情は1869年とは少し異なっている。彼は次のように書いている。

もし私が大学の当局の人間なら、大学の教師に講演のためにあちこちと旅行をすることを禁じるでしょう。彼の全神経はその職についているところに、集中しているものだからです。私はこの種のあらゆる申し出を断わってきましたし、そのことをはっきりと語ってきましたので、それを撤回することはできません。それだけでなく、最近年月が経つとともに、ここバーゼルで一般の公衆の前で語ることをも厭うようになってきました。それで今年の冬には、ただ2、3回公衆の前で語るだけです。私たち講師は、一連の講義によって、公立図書館にささやかな基金を提供しなければならないからです。もちろんバーゼルの一般の公衆について苦情を言っているわけではありません。彼らはむしろ私をよろこばせてくれました。いまましいのは老いです。このため私は慎重になりつつあります。今まで休暇ごとにしてきた旅行も避けるようになってきています⁴⁰⁾。

ブルクハルトが今回断わる一番の理由はバーゼルとの関わりや講義の準備のためではなく、老いであった。そのためバーゼルの公衆の前で語ることもいとうようになっていた。この冬に行なった公開講義はナポレオンに関する2回の講義（119）だけである。一般公開講座の方はすでに1878年11月に3回にわたって行なったタレーランの講義（114）を最後にやめていた。休暇中の旅行のことも述べているが、ブルクハルトにとって旅行は休暇の保養ではなく、休暇を利用しての美術の調査であった。これができなくなってきた。このころからしばしば手紙に講義の苦痛が語られる。「この2月22日が、私が一般の公衆の前に姿をあらわす最後の時となることを願っています。これは近年まったく苦痛になってきています。」

⁴¹⁾（1881年2月16日マクス・アリオート宛）しかし彼はなお1887年まで公開学術講義をし続けた。その有力な動機は、図書館への補助であった。1881年のシャウエンブルクの手紙ですでに述べているが、1882年12月23日付けのマクス・アリオート宛書簡でも「1月に2度講堂で話をしなければなりません。一般の聴衆に語ることはだんだんとやっかいなことになっています。それは私の年齢にはもはや向きません。私がいとうのは、準備のための労苦ではなく、公衆の前に登場することです。しかし講座の収入は私たちの貧

しい図書館のために使われるので、そこから抜けることはできません。」⁴²⁾と述べている。すでに述べたように、1879年以後、図書館の経費にまわすため、公開学術講義を有料にしていた。

こののち彼は1886年に歴史学講座を辞任した。そして公開学術講義も1887年11月を最後にやめる。しかし大学における美術史講義は続けられた。そして、歴史考古協会におけるよく知っている会員間の会合での講義はなお続けられた。しかしこれも1890年からは年1回となり、1892年12月15日が最後となった。そして、喘息の発作のため、1893年には美術史講座をも辞任し、完全に公的な活動から身を引くこととなった。本講の冒頭で引用した自伝は、完全な引退後に書かれたものである。ここでは、講義に専念して著作における成功を断念したこと、しかしそれは苦痛ではなくむしろ真の幸福感をともなったこと、また講義の内容は特殊な学識の伝達よりも歴史的考察一般を養うものであったこと、そして、公開講義におけるバーゼル市民の聴講生を含めて、彼の講義を聴いた人々の間で彼へのよき思い出が残ることを願うことなどが、記されていた。この自伝を書いたのと同じ頃、ブルクハルトは、チューリヒのギムナジウムの歴史学の教授であったオットー・マルクヴァルトに次のように書いた。「ほこりにまみれることになる分厚い歴史の本を書くよりは、講壇に立って、その時々課題に向かうために労する方が、私にとってしあわせでした。歴史の著作は今日すぐにすたれてしまいます。しかし私の聴衆たちは私の死を超えて、私のことを好く憶えてくれるでしょう。」⁴³⁾ (1893年5月25日付)

ここには自伝と同じ考えが表明されている。自伝と照らし合わせるとき、彼の教養観や歴史観と講義の実践、とりわけ自由講義の実践との繋がりがほのかに見えてくる。そして、彼がもっとも充実していた時期になぜギリシア文化史の講義に打ち込んだかを考えるヒントもあるのではないだろうか。これらのことを別の機会に考えてみたい。

注

- 1) Jacob Burckhardt, Gesamtausgabe, Bd.1, Frühe Schriften, hrsg. v. H.Trog und E.Düll, 1930, S.VIII.
- 2) Ibid., S.VIII f.
- 3) Jacob Burckhardt, Briefe. Vollständig und kritische bearbeitete Ausgabe, 10 Bde & Gesamtregister, 1949-1994. 以下Brと略記。
- 4) Werner Kaegi, Jacob Burckhardt, Bd.4, 1967, S. 8.
- 5) Ibid., S.8-34.
- 6) Jacob Burckhardt, Briefe, Bd.3, S.425f.
- 7) Werner Kaegi, op.cit., Bd.4, S.8-12.
- 8) Jacob Burckhardt, Gesamtausgabe, Bd.1, S.IX.
- 9) Jacob Burckhardt, Gesamtausgabe, 14 Bde., 1929-1934. 以下GAと略記。
- 10) Jacob Burckhardt, Gesammelte Werke, 10 Bde.
- 11) Jacob Burckhardt Werke, Kritische Gesamtausgabe, 27 Bde. 以下JBWと略記。
- 12) GA, Bd.14, S. 509-514. なおこの版をもとにブルクハルトの講演集が邦訳されている。ヤーコプ・ブルクハルト『文化史講演集』(新井靖一訳、筑摩書房、2000年)。
- 13) JBW, Bd.13, S.916-920.
- 14) Br, Gesamtregister, S.149-152.
- 15) Br, Bd.5, S.303.
- 16) Werner Kaegi, op.cit., Bd.2, 1950, S.550.

- 17) Ibid., S.558.
- 18) Br, Bd.2, S.126, 142, 276, 281; Werner Kaegi, op.cit., Bd.2, S.469-472.
- 19) Br, Bd.3, S.327f.; Werner Kaegi, op.cit., Bd.3, S.289.
- 20) Br, Bd.3, S.304, 337, 342; Werner Kaegi, op.cit., S.329.
- 21) Br, Bd.3, S.176, 366; Werner Kaegi, op.cit., S.357f.
- 22) Werner Kaegi, op.cit., Bd.3, 1956, S.532.
- 23) Br, Bd.1, S.287.
- 24) Br, Bd.4, S.92, 316.
- 25) Br, Bd.4, S.98.
- 26) Br, Bd.4, S.98.
- 27) Br, Bd.4, S.352; Werner Kaegi, op.cit., Bd.5, S.89.
- 28) Br, Bd.4, S.137.
- 29) Br, Bd.4, S.153.
- 30) Br, Bd.14, S.X.
- 31) Br, Bd.4, S.316; Bd. 5. S.303.
- 32) Ernst Ziegler, Jacob Burckhardts Vorlesung über die Geschichte des Revolutionszeitalter, 1974, S.563-568.そこにバーゼル大学におけるブルクハルトの全講義の受講者が記されている。はっきり50名以上の受講者を確認できる講義のタイトルと年度は次の通りである。「17・18世紀の歴史」(1871, 1875), 「ギリシア文化史」(1872, 1876), 「革命時代史」(1875/76), 「16世紀の歴史」(1880/81), 「中世文化」(1882, 1886), 「古代美術」(1880, 1890)。
- 33) Br, Bd.5, S.61.
- 34) Br, Bd.5, S.177.
- 35) Br, Bd.4, S.92.
- 36) Br, Bd.4, S.23.
- 37) その他 Br, Bd.5, S.605, 630; Bd.8, S.1030など。
- 38) JBW, Bd.13, S.904.
- 39) たとえば Br, Bd.4, S.456.
- 40) Br, Bd.7, S.194.
- 41) Br, Bd.7, S.225.
- 42) Br, Bd.8, S.97.
- 43) Br, Bd.9, S.106.

ブルクハルト公開講義一覧

番号	年月	講義テーマ	種類	ブルクハルト関連年表
1	1843/44冬	Murillo	①	
2	1843/44冬	Stilleben	①	
3	1843/44冬	Rokoko	①	
4	1844.3.7,21	Ursachen und Verlauf des Veltliner Mordes im Jahre 1620	HG	1844年バーゼル大学で教授資格試験合格
5	1844.3.29	Über die Lage Frankreichs zur Zeit des Armagnakenzuges 1444	②	1844年バーゼル大学歴史学講師
6	1844.12.6	Der Bauriss des Klosters St.Gallen	AnG	1844年6月～45年12月バーゼル新聞編集者
7	1844/45冬	Vorlesungen über Geschichte der Malerei seit Rafael	AkG	
8	1845/65冬	Vorlesungen über Geschichte der Malerei vom 17. Jhdt	AkG	1846年3月～6月 イタリア旅行
9	1846.2.12	Abt Suger und die Kirche von St.Denis	AnG	1846年10月～47年9月 ベルリン滞在
10	1848.11.2	Eine Episode aus der Genfer Geschichte: Escalade 1602	HG	1847年9月～48年4月イタリア旅行
11	1848/49冬	16 Vorlesungen über die Zeit des dreißigjährigen Krieges	AkG	
12	1849.10.4	Über Inhalt und Wert italienischer Staatsschriften in Betreff der Schweizergeschichte des 16. und 17. Jhdts	③	
13	1849.11.9 - 50.3.15	17 Vorlesungen über die Blütezeit des Mittelalters	AkG	
14	1850.10.31.11.14,28	Erzbischof Andreas von Krain	HG	
15	1851.1.15	Über einen gewirkten Wandteppich	④	
16	1851.12.4	Geschichte der Staatsgewalt im spätern römischen Reich	HG	1853年3月～54年4月 イタリア旅行
17	1852.11.2 - 53冬	18 Vorlesungen über die Zeit Friedrichs des Großen	AkG	1853年『コンスタンティヌス大帝の時代』
18	1854.11.22	Rede über die Heilige Cäcilie	⑤	
19	1855.1.17- 3.28	9 Vorlesungen literarischen Inhaltes : Seb. Münsters Cosmographie; Calderons "Standhafter Prinz"; Legende des hl. Severin; einige Dichter Napoleons; Maximes et pensées du duc de la Rochefoucauld; Byrons Childe Harold; Manzoni; Die Verlobten; Shiller, Die Künstler; Corneille, Polyeucte	AkG	1855年スイス連邦工業大学教授 1855年『チチェローネ』
20	1855.12.27	Über den Charakter der Königin Agnes von Ungarn	⑥	
21	1856.1.26	Die ökonomischen Verhältnisse beim Bau der Benediktinerabtei St. Trond in Belgien	⑥	
22	1856.3.22	Der Bau u. die innere Einrichtung der ersten, am Ende des 10. Jhdts errichteten Klosterkirche in Petershausen bei Konstanz nach dem Chronicon Petershusianum u. der Vita S. Gebhardi	⑥	
23	1856.12.20	Die Pluralität der Kirchen bei den mittelalterlichen Klöstern	⑥	
24	1857.1.17	Die Beschreibung des Fronleichnamfestes zu Viterbo i.J.1462	⑥	
25	1857.12.3	Der Zustand Roms unter Gregor dem Großen	⑥	
26	1857.12.5	Das Fenster der hl. Clara in Königsfelden	⑥	
27	1858.1.16	Die Ziergebäude im Innern von Kirchen	⑥	1858年バーゼル大学歴史学正教授
28	1858/59冬	Vorlesungen über die Kunst der Renaissance	privat	第一期 (1858～61年)
29	1858.12.9	Über einige Statuetten der Schmidtschen Sammlung	AnG	
30	1859.1.5	Über landschaftliche Schönheit	aV	
31	1859.2.26	Über das Freiburger Münster	aV	
32	1859.11.9	Gedächtnisrede auf Schiller	⑦	
33	1860.1.10	Über frühere Säkularisationsversuche im Kirchenstaat	aV	
34	1860.2.9	Benedig und Florenz im 15. Jahrhundert	HG	1860年10月イギリス旅行

35	1860.2.20	Über die Goldschmiedrisse der öffentl. Kunstsammlung zu Basel	AnG	1860年『イタリア・ルネサンスの文化』
36	1860.12.18	Über Rabelais und seine Zeit	aV	
37	1861.2.14	Die griechischen Bildwerke des Britischen Museums	AnG	
38	1861.3.19	Über den Charakter des Augustus	aV	
39	1861.11.10-62.2.15	15 Vorlesungen über Kunst und Altertum: Saint Maurice im Wallis; Peter Paul Rubens; Altbreisach; das Mosaik; eine deutsche Kirche des 11.Jhdts (das Münster zu Basel); Holbein als Fassadenmaler; die Westminsterabtei; das Museum von Colmar; das Abendmahl des Leonard da Vinci; über Fontänen; der Tessin in landschaftlicher Beziehung; das Relief; die Wallfahrtsberge von Oberitalien; ein Kirchhof für Basel; über Betrachtung von Bildern u. Galerien	AkG	
40	1862.10.30	kleinere Mitteilungen aus der florentinischen Geschichte	HG	
41	1863.1.20	Über die Studien der römischen Künstler in den Ruinen von Rom	AnG	
42	1863.3.19	Das Verhältnis des Ruhmes zur italienischen Architektur	HG	
43	1863.11.7-64.2.12	15 Vorlesungen über die Zeit der Gegenreformation 1560-1600	AkG	
44	1863/64 冬	2 Vorträge über den Verfall Spaniens seit Philipp II.	VjK	
45	1864.5.3	Über den Wert des Dio Chrysostomus für die Kenntnis seiner Zeit	⑧	
46	1864.12.12	Der Architekt Joh. Bernh.Fischer von Erlach	AnG	
47	1865.1.5	Über Deckenverzierungen	pV	
48	1865.1.12	Die Kunstformen des Schmiedeiseins	pV	
49	1865.1.23	Über 2 Semmen an einer Goldfigur des Basler Kirchenschatzes	AnG	
50	1865.1.24	Das Straßburger Münster	aV	
51	1865.1.27	Über einige Statuen am Giebelfeld des Parthenon.	AnG	
52	1865.10.	2 Vorträge über die Lage Europas im Jahre 1812	VjK	
53	1865.11.12,19,26	Basel nach dem großen Erdbeben	pV	
54	1865.12.12	Eine Tempelweihe unter Augustus	aV	
55	1865.12.21	Über verschiedene Denkmäler des südlichen Frankreich	AnG	1865年春・秋 フランス旅行
56	1866.1.25	Besprechung von Edgar Quinets " La Révolution "	HG	
57	1866.2.15	Über den Gebrauch von Modellen in der Architektur	AnG	
58	1866.10.21,28	Über Hans Holbein den Jüngern	pV	
59	1866.10.26,11.2	Der 18. Brumaire 1799	VjK	
60	1866.11.6	Über die poetischen Grabschriften der Griechen	aV	
61	1866.11.13	Über Ovid in der Verbannung	aV	
62	1866.11.20	Über die Heldenlieder der Serben	aV	
63	1866.11.27	Über Camoëns und sein Heldengedicht	aV	
64	1866.12.4	Über Shakespeares Richard III.	aV	
65	1866.12.17	Thongruppen der Renaissance	AnG	1867年 フランス旅行
66	1867.12.12,19	Die Zeit um das Jahr 1000	pV	1867年『イタリア・ルネサンスの建築』
67	1867/68冬	2 Vorträge über Karthago als Handelstaat	VjK	
68	1868.1.16	Über Reiterstatuen	AnG	
69	1868.10.15,22,29	Karl der Große	pV	1868年「歴史の研究について」の講義始める
70	1868.12.9	Kunsthistorische Mitteilungen	AnG	(1868/69, 70/71, 72/73)
71	1869.1.22,29	Die Kolonien der Griechen	VjK	
72	1869.3.18	Die Altertümer von Säckingen	AnG	
73	1869.11.11,18	Über gotische Kirchen	pV	

74	1869.12.4	Das Schloß von Blois	aV	
75	1869.12.11	Über den Kupferstecher Matthäus Merian	aV	
76	1869.12.18	Über den Münsterkreuzgang	aV	
77	1869/70冬	Die Reisen der Araber (2 Vorträge)	VjK	
78	1870.1.13	Autun	AnG	
79	1870.11.8,15,22	Die historische Größe	aV	
80	1870.12.8,15,22	Alexander der Macedonier	pV	
81	1870/71冬	2 Vorträge über Karl der Kühnen	VjK	
82	1871.1.26	Die Casa di Tiberio auf dem Palatin	AnG	
83	1871.11.7	Über Glück und Unglück in der Weltgeschichte	aV	
84	1871.11.9,16,23	Das Freiburger Münster	pV	
85	1871.12.12	Die Griechen und ihr Mythus	aV	1872年夏ヴィーン、ミュンヘンに旅行
86	1872.11.5	Über Griechische Heroen und Gespenster	aV	1872年「ギリシア文化史」の講義始める
87	1872.11.14	Die Odyssee	pV	(1872,74,74/75,76,78,78/79,80,80/81,83/84,85/86)
88	1872.11.21	Cardinal Richelieu	pV	
89	1872.12.3	Über Besichtigung altdeutscher Bilder	aV	
90	1872/73冬	Das Englische als künftige Weltsprache (2 Vorträge)	VjK	
91	1873.2.18	Thomas Morus und die Utopia	aV	
92	1873.11.11	Bei Anlaß von Vereinsphotographien	aV	1873年夏ネーデルラント旅行
93	1873.11.18	Über niederländische Landschaftsmalerei	aV	
94	1873.11.27, 12.4,11	Ludwig XI. von Frankreich	pV	
95	1873/74冬	Die Werthschätzung der Arbeit im Alterthum (2 Vorträge)	VjK	
96	1874.1.15	Mitteilungen über antike Kunstwerke	AnG	1874年 美術史講義を兼任
97	1874.11.5,12,19	Leben und Sitten des Adels um 1500	pV	第三期 (1874~83年)
98	1874.11.24,12.1,8	Niederländische Genremalerei	aV	
99	1874/75冬	Augsburg im 15. Jahrhundert (2 Vorträge)	VjK	
100	1875.11.4	Wallenstein laut der Geschichte	pV	
101	1875.11.11	Schillers Wallenstein	pV	
102	1875.11.16	Ein Gang durch das vaticanische Museum	aV	
103	1875.11.23,24*	Don Quixote	aV	
104	1875.12.2	Über die Wandgemälde in der Krypta des Basler Münsters	HAG	
105	1876.11.7	Über die Kochkunst der spätern Griechen	aV	
106	1876.11.14	Die Phäakenwelt Homers	aV	
107	1876.11.23,30	Mailänderkriege seit 1521	pV	
108	1876.10.25,11.1	Aus der letzten Zeit Philipps II.	VjK	
109	1877.3.15	Der falsche Demetrius	pV	
110	1877.10.25,11.1	Spanien unter Philipp II.	pV	
111	1877.11.6	Rembrandt	aV	
112	1877.11.13	Rococo	aV	
113	1878.1.31	Das Bild des Domherrn Angerer von Holbein in Innsbruck	HAG	
114	1878.11.7,14,21	Talleyrand	pV	
115	1879.2.20	Mitteilungen über das Basler Konzil	HAG	1879年7月末~9月イギリス旅行
116	1880.2.3	Jakob Ruysdael	aV	
117	1880.2.10	Claude Lorrain	aV	
118	1880.11.10	Vorweisung der Photographie einer etruskischen Aschenkiste	HAG	
119	1881.2.8,22	Napoleon I. nach den neuesten Quellen	aV	
120	1881.11.10	Über das wissenschaftliche Verdienst der Griechen	㊦	
121	1882.2.7	Rafael als Porträtmaler	aV	

122	1882.2.21	Über Echtheit alter Bilder	aV	1882年夏 ベルリンとプラハ旅行
123	1883.1.16.30	Aus großen Kunstsammlungen	aV	1883年春 師範学校講義完全に免除
124	1883.2.1	Mittheilungen über neuere kunsthistorische Schriften	HAG	第四期 (1883春~86秋)
125	1883.10.30	Die Griechen und ihre Künstler	aV	1883年夏、ローマへ旅行
126	1883.11.13	Die Reise einer Kaiserbraut (1630)	aV	
127	1884.2.7	Mittheilungen über neuere kunsthistorische Publicationen	HAG	
128	1884.2.12	Die Weihgeschenke des Alterthums	aV	
129	1884.10.28	Pythagoras	aV	
130	1884.11.11	Über erzählende Malerei	aV	
131	1885.3.10	Die Anfänge der neuern Porträtmalerei	aV	
132	1885.10.27	Die Malerei und das neue Testament	aV	
133	1885.10.10	Processionen in der alten Welt	aV	
134	1885.11.12	Matthias Grünewald	HAG	
135	1886.2.2	Format und Bild	aV	
136	1886.10.26	Van Dyck	aV	1886年歴史学講座を辞任
137	1886.11.9	Das byzantinische Reich	aV	第五期 (1886~93年)
138	1887.2.15	Die Allegorie in der Künsten	aV	
139	1887.10.25	Demetrios Poliorketes	aV	
140	1887.11.1	Macbeth	aV	
141	1887.11.15	Die Briefe der Madame de Sévigné	aV	
142	1888.3.15	Ein antikes Grabmal zu St. Rémy	HAG	
143	1888.12.20	Erläuterung von Photographien nach ägyptischen Porträts	HAG	
144	1889.1.3	Das Brevier Grimani in der Biblioteca Marciana	HAG	
145	1889.2.28	Erläuterung von Photographien spanischer Baudenkmäler	HAG	
146	1889.10.24	Sculpturen der christlichen Epoche (Berliner Katalog)	HAG	
147	1890.3.27	Der venetianische Geschichtsschreiber Marino Sanuto	HAG	
148	1890.10.16	Mittheilungen über den Barocco	HAG	
149	1892.3.24	Die Gemälde des Senators Giovanni Moreli in Bergamo	HAG	
150	1892.12.15	Marien Krönung in der bildenden Kunst	HAG	1893年美術史講座を辞任

Jaobc Burckhardt, GA, Bd.14, S. 509-514 ; Jacob Burckhardt, JBW, Bd.13, S. 916-920 ; Jacob Burckhardt, Briefe, Gesamtregister, S.149-152より作成。

①=Künstlertgesellschaft ②教授資格取得講義 ③Allg. Geschichtforschende Gesellschaft der Schweiz

④=Museumverein ⑤Basler Liedertafel

⑥チューリヒでの講義 (20=Rathausvortrag; 21, 22, 23, 24, 26, & 27=AnG zu Zürich)

⑦バーゼル大学文学部 ⑧Rede bei Eröffnung des Sommerkurses am Pädagogium

⑨Rede in Vertretung des Rektors

HG=Historische Gesellschaft AnG=Antiquarische Gesellschaft AkG=Akademische Gesellschaft

VjK=Verein junger Kaufleute pV=populärer Vortrag aV=akademischer Vortrag